

主格の Wh 疑問文における語順について

濱崎孔一廊・宇都斗貴

1. はじめに

英語は、語順が重要な役割を果たす言語である。次の例を見てみよう。

- (1) (a) She can speak French.
(b) Can she speak French?
(2) (a) She speaks French.
(b) Does she speak French?

(Huddleston and Pullum (2002: 94))

(1a) のように助動詞を含む例に対する疑問文は、(1b) に見られるように、いわゆる主語・助動詞倒置 (subject-auxiliary inversion) が起きる。一方、(2a) のような助動詞を含まない例文に対応する疑問文 (2b) では、do による支え (*do-support*) という現象が生じる。このような yes/no 疑問文では、do による支えがあるかないかという違いはあるにせよ、いずれの場合でも主語・助動詞倒置という現象が観察される。ところが、Wh 疑問文のときには、このような語順の変化に、yes/no 疑問文ではみられない違いがある。次の例を比較してもらいたい。

- (3) (a) **What** *did* she tell you?
(b) **How** *did* you find the seminar?
(c) **Who** told you that?

(Huddleston and Pullum (2002: 95, 907))

(3a, b) の例のように Wh 句が主語ではない場合には主語・助動詞倒置が起こるのに対して、(3c) の例にみられるように Wh 句が主語であれば主語・助動詞倒置が見られない。一体なぜ Wh 句が主語になると主語・助動詞倒置という現象は生じないのであろうか。そこで、本稿では、一般に疑問文形成時に見られる主語・助動詞倒置が、Wh 句が主語となった場合に見られなくなるのは何故かという謎を解き明かすことを目的とする。

議論は以下のような構成となっている。まず、第2節で、先行研究をもとに、この問題に関係してくる理論上のポイントを明らかにする。いわゆる主語・助動詞倒置という現象がどのような意味を持っているのか、そこにどのような機能が作用しているかを見ていく。次に第3節では、前節で明らかにされた定形要素の本質について、認知文法理論から明らかにされた時制要素と法助動詞の機能をもとに、さらにこれらの要素が語順とどのように関わっているのかを論じていく。第4節は、Wh 句が文頭に置かれる意味を、伝統的な数量詞の意味解釈をもとに検証していく。第5節が、以上の議論を踏まえた上での結論となる。

2. 先行研究

生成文法 (Generative Grammar) 理論では、たとえば、George (1980), Chomsky (1986) で提唱されている空虚な移動仮説 (vacuous movement hypothesis) に関する議論の中でこの現象に言及されている。日本語や中国語のように Wh 要素は LF 移動によって生じる、すなわち、通常の統語的操作の段階では Wh 語句に相当する語が文頭に移動することなく、意味解釈がなされる論理形式 (LF = Logical Form) 部門で意味解釈のための移動が行われると想定している。¹これに対し、英語のような言語では (4b) の例に見られるように、Wh 移動と主語・助動詞倒置という統語的操作が通常は同時に生じるが、(4a) に示すように、Wh 句が主語となっている場合のみ主語・助動詞倒置を誘発せず、「空虚な移動」となるとされている。

(4) (a) **Who** likes John?

(b) **Who** *does* John like?

(Chomsky (1986: 48))

空虚なのであるから、実質的に移動はないとも言えるが、仮にこの仮説が認められたとしても、ではなぜ (4a) のような例では主語・助動詞倒置が生じないのかということの説明はない。

次に、Halliday and Matthiessen (2014) の機能主義文法の枠組みでのアプローチを見てみよう。機能主義文法家たちは、主語・助動詞倒置という概念を用いない。言語の形式的側面よりも、個々の要素のもつ機能に焦点を当てて分析をしている。まず、次の yes/no 疑問文から考えていこう。

(5) (a) *Can* he paint well enough?

(b) *Do* we have anything in common?

(Thompson (2014: 57))

ここで、主語 (Subject) と定形要素 (Finite) から成る Mood² という概念を用いている。(5) のような疑問文では、yes か no かいずれかの極性 (polarity) を問うている。そのとき、Mood は [Finite Subject] という語順になり、このような形の Mood が主題 (Theme) として提示されることで、対話者に対して疑問を発するというコミュニケーション上の機能を果たしていると捉えている。³一方で、Wh 要素の役割は、yes/no 疑問文の場合のように命題内容全体の極性について聞いているのではなく、一部の情報を求める機能を有する。次の例を見てほしい。

(6) (a) **When** *is* he leaving?

(b) He is leaving ... [time expression] ...

(Thompson (2014: 57))

(6a) のような Wh 疑問文の発話者は、(6b) で示されるような内容を前提 (presupposition) としてい

¹ 生成文法理論における極小主義 (Minimalism) のより新しい枠組みからすれば、Chomsky (1986) の分析が古いのは確かだが、本質的な考え方は一貫していると思われる。

² Mood という用語に関しては、従来の declarative mood, interrogative mood, imperative mood で用いられる法 (mood) と区別するために、語頭を大文字にして Mood と表記し区別している。これに従い Mood はもちろんだが、これを構成する要素としての主語や定形要素についても以後は Subject, Finite と記すことにする。

³ Thompson (2014: 150) を参照のこと。

る。すなわち、**He is leaving** の部分は既知の情報で、それがいつ行われるのかという時を表す部分のみが疑問の対象となっている。その疑問の対象となる **Wh** 句を主題として提示することで、自分に欠落している求めたい情報はどの部分なのかを相手に示すという機能を果たしている。つまり、**Subject** と **Finite** の語順を変えた **Mood** を主題として提示する機能と、**Wh** 句を主題として提示する機能が競合しているのである。(7) の例に示すように、**Wh** 句が主語以外の場合には、最初に伝えたいメッセージは、疑問があるということを示す[**Finite Subject**]の語順による情報よりも、聞きたい情報はこの部分だけであるということの方が重要だから、**Wh** 句を第 1 構成素位置に置くという原理の方が優先されるのである。

(7) (a) **Why did the affair end?**

(b) **What do you expect me to do?**

(c) **How many are there?**

(Thompson (2014: 57))

このように、文構造上最初に現れるのは主題であるという主題構造 (**Thematic structure**) の観点から見ると、**Wh** 句の前置の方が **Mood** 内の語順の倒置よりも優先されるということは説明できているように思われる。

(8) (a) **Who's been sleeping in my bed?**

(b) **What kind of idiot would do something like that?**

(c) **Who [past] typed out that note?**

(Thompson (2014: 58))

もし、(9) に示すような形式をとると、[**Finite Subject**]の **Mood** によってもたらされる疑問 (聞きたいこと) があるというメッセージよりも、その疑問は具体的にどの部分なのかという **Wh** 句が示すより重要なメッセージの方が後回しになるから不適格だと説明できよう。

(9) (a) ***Has who been sleeping in my bed?**

(b) ***Would what kind of idiot do something like that?**

(c) ***Did who type out that note?**

しかし、**Wh** 句は相手に求めたい情報部分を特定して示す機能をもつので、**Wh** 句を主題として最初に提示するということは理解できるが、[**Finite Subject**]という語順の **Mood** が何故疑問の存在を提示する機能を持つことになるのかの説明が不十分である。この疑問を解くためには、**Finite** の持つ機能と、さらに語順の果たす役割を明らかにしなければならない。そうでなければ、ただ単に現象の記述と変わらないからである。

そこで、次の節では、**Finite** とは一体どういう意味・機能を持っているのか。また、**Finite** と語順の関係は何かということを検討していくことにする。

3. 定形要素の意味・機能

第 2 節では、生成文法理論のいう主語・助動詞倒置という分析よりも、[**Finite Subject**]という **Mood**

の持つ機能に焦点を当てた分析の方がより説明力があるということを見てきた。そこで本節では、なぜ助動詞ではなく Finite の方がより適切なのか、また、Finite の持つ意味・機能とは何かということを考察していくことにする。議論の出発点として、次のような例文をもとに検討してみよう。

- (10) (a) He **stated** this. [tense + (lexical verb)]
 (b) He **will** state this. [modal/tense + (lexical verb)]
 (c) He **has** stated this. [tense + have + (lexical verb)-en]
 (d) He **will** have stated this [modal/tense + have + (lexical verb) -en]
 (e) He **was** stating this. [tense + be + (lexical verb)-ing]
 (f) He **will** be stating this. [modal/tense + be + (lexical verb)-ing]
 (g) This **was** stated. [tense + be + (lexical verb) -en]
 (h) This **will** be stated. [modal/tense + be + (lexical verb) -en]
 (i) This **will** have been being stated. [modal/tense] + [perfect] + [progressive] + [passive] + (lexical verb)

いずれの例文も命題内容 (propositional content) は同じ [he state this] である。(10a) では、この命題内容に時制 (tense) という要素だけが関与している。(10b) では、時制を含む法助動詞 (modal) ⁴ が現れている。(10c) は同じ命題内容に現在完了、すなわち、現在時制と完了相 (perfect aspect) が関わった例で、(10d) はこれに法助動詞が加わった例である。(10e) は、同じ命題内容が過去進行形になった例、すなわち、過去時制と進行相 (progressive aspect) が組み込まれた表現で、(10f) ではこれに法助動詞が付け加えられている。(10g) は、同一の命題内容が過去時制の受動態 (passive voice) で表されたもので、これに法助動詞が加わると (10h) になる。すなわち、これらの定形節 (finite clause) には、時制・法性・相 (完了相と進行相)・態が現れることが可能であり、(10i) に示すように、これらが全て具現化されることも可能である。(10) の全ての例に必ず表されているのは太字部分に現れる時制である。

では、これらの例に必ず現れる文法機能は時制だけなのだろうか。(11) の例を見てもらいたい。

- (11) (a) They play tennis. [play + φ]
 (b) They played tennis. [play + -ed]

(11a) は現在時制、(11b) は過去時制の例文である。(11b) の例を見ると、過去時制の場合には、これが時制接辞-ed として現れるのであるが、(11a) では顕在的な時制接辞は見られない。だからといって時制がないとは言えない。現在時制はゼロ接辞、すなわち音形や形態を持たない要素として具現化されているのである。換言すると、過去時制は有標 (marked) であるのに対し、現在時制は無標 (unmarked) ということになる。すると、顕在的に接辞等で表されていないからといって、特定の文法機能が現れていないとは言えないのである。同じことが、法助動詞にも当てはまると Langacker (1991, 2008, 2009) は主張している。すなわち、時制要素と法助動詞は共に Grounding という機能を持ち、この機能は時

⁴ 法助動詞に時制が関わっていることは、この文に対応する He would state this という例を見ると、法助動詞に過去時制が含まれていることから明らかである。したがって、will にも無標 (unmarked) の現在時制が内在していると分析するのが自然である。法助動詞と時制との関係性については、Langacker (1991: Ch. 5) の議論を参照されたい。

制要素と法助動詞の組み合わせとして具現化されることになる。次の例で考えてみよう。

- (12) (a) They like it. [like + ϕ] (immediate reality)
(b) They liked it. [like + -ed] (non-immediate reality)
(c) They will like it. [[will + ϕ] + like] (immediate irreality)
(d) They would like it. [[will + -ed] like] (non-immediate irreality)

(12) の例では、いずれも [they like it] という命題内容の出来事が、ある基準点 (reference point) から見て、時間的および空間的にどこに位置づけられると認識しているかによって区別されている。この場合の基準点は発話の場、あるいは、コミュニケーションの場と言えよう。これを Langacker は Ground (G)⁵と呼んでいる。法助動詞を顕在化させるか否かで、その出来事は非事実 (irreality) 領域内に位置づけられるのか、それとも既知の事実 (known reality) 領域内に位置づけられるのかという認識を表す。一方、時制の方は過去時制がある種の認識的距離 (distance) を表し、現在時制は伝達内容の出来事が発話の場に近接しているという認識⁶を示す。したがって、法助動詞と時制は、それぞれの法性 (modality) の意味と時制の示す時間関係以外に、伝達内容の出来事を発話の場を基準点にしてどのような位置にあると捉えているかという認識を示す機能を有すると考えられる。さらに、これらの Finite の要素は、語順の観点から見ると、主題の後の第2構成素位置に置くことで、伝達内容の極性 (肯定か否定か) を表すと同時に、命題内容の事実性 (あるいは、非事実性) を確定する話者の認識を示している。次の例で考えてみよう。

- (13) (a) They **do** not like it. [do + ϕ]
(b) They **did** not like it. [do + -ed]
(c) They **will** not like it. [will + ϕ]
(d) They **would** not like it. [will + -ed]

(13) の例はいずれも、否定辞 not が法助動詞・時制要素の直後に現れている。日本語のような言語であれば、動詞の表す動作・行為を否定するところであるが、英語の場合は、命題内容の事実性 (肯定極性) を確定する機能の否定になっていると考えられる。それは、(14) のような例からも明らかであろう。Swan (2016)では、ここでの do の機能は肯定文の「強調 (emphasis)」としか記述されていないが、命題内容の事実性に対する話者による確定機能だとすると、確定をもっと強めた、明確な「断定」ということができよう。さらに言うと、その機能を担う主体は、do ではなく時制要素である。

- (14) (a) **Do** sit down.
(b) You **do** look nice today!
(c) She thinks I don't love her, but I **do** love her.
(d) I don't do much sport now, but I **did** play football when I was younger.

(Swan (2016: 27.3))

⁵ Ground の詳細については、Langacker (2008: 259)を参照のこと。

⁶ このような認識を示す者を Langacker は Conceptualizer と呼ぶ。これは話し手にも聞き手にもなり得るが、それ以外の第三者の可能性もある。詳しい議論については、Langacker (2008: Ch. 9)を参照されたい。

それゆえ、(14) の例では、いずれも叙述内容の出来事の強調というより、表された出来事に対する話者の主観的判断、すなわち確定という機能の強調なのである。これは、時制や法助動詞の示す法性が表現される客体 (object) から、表現する主体 (subject) の方へ変化⁷してきたことと関係する。機能主義的な観点から見ると、経験構成的メタ機能 (experiential metafunction) から対人的メタ機能 (interpersonal metafunction) ⁸への変化と捉えることができる。

今度は、疑問文になったときに、法助動詞や時制要素がどのような分布 (distribution) を示すのか見てみよう。

- | | | |
|----------|----------------------------|--------------|
| (15) (a) | Do they like it? | [do + φ] |
| (b) | Did they like it? | [do + -ed] |
| (c) | Will they like it? | [will + φ] |
| (d) | Would they like it? | [will + -ed] |

(15) の例は、いずれも yes/no 疑問文で、表された出来事の実在性を問う働きを示している。伝達内容の実在性を確定する機能をもつ法助動詞や時制要素を第2構成素位置に置かず、主題となる主語と倒置することで確定できない内容、すなわち疑問だということを示しているのである。このことは、

(10) に示されたそれぞれの例文 ((16) として再掲) において、疑問文になったとき前置されるのが太字部分の時制要素と法助動詞であることから分かる。

- | | | |
|----------|--|---|
| (16) (a) | He stated this. | [tense + (lexical verb)] |
| (b) | He will state this. | [modal/tense + (lexical verb)] |
| (c) | He has stated this. | [tense + <i>have</i> + (lexical verb)-en] |
| (d) | He will have stated this | [modal/tense + <i>have</i> + (lexical verb) -en] |
| (e) | He was stating this. | [tense + <i>be</i> + (lexical verb)-ing] |
| (f) | He will be stating this. | [modal/tense + <i>be</i> + (lexical verb)-ing] |
| (g) | This was stated. | [tense + <i>be</i> + (lexical verb) -en] |
| (h) | This will be stated. | [modal/tense + <i>be</i> + (lexical verb) -en] |
| (i) | This will have been being stated. | [modal/tense] + [perfect] + [progressive] + [passive] + (lexical verb) |

たとえば、(16c) や (16e), (16g) の例を否定文にすると次に示すように、一見したところ完了相を示す助動詞 *have* や、進行相や受動態を示す助動詞 *be* が主語と倒置を起こしているように見える。

- | | |
|----------|-----------------------------|
| (17) (a) | <i>Has</i> he stated this? |
| (b) | <i>Was</i> he stating this? |
| (c) | <i>Was</i> this stated? |

ところが、これらの助動詞の前に法助動詞が現れた (16d) や (16f), (16h) の疑問文を観察すると、移動しているのは *have* や *be* の助動詞ではないということは明らかになる。

- | | |
|----------|----------------------------------|
| (18) (a) | Will he have stated this? |
|----------|----------------------------------|

⁷ このような変化を Langacker (1991: 270) では主観化 (subjectification) と呼んでいる。

⁸ 詳しい説明については、Thompson (2014: 30) および Halliday and Matthiessen (2014: 30-32) を見てもらいたい。

(b) **Will he be stating this?**

(c) **Will this be stated?**

(18) の例で主語と倒置を起こしているのは、時制要素を含む法助動詞であり、完了相の助動詞 **have** や進行相・受動態の助動詞 **be**⁹は倒置を起こしていない。それゆえ、(17) の例で前置されている実体は、時制要素なのである。したがって、生成文法理論でいう主語・助動詞倒置という名称は記述としての妥当性を欠いていると言えよう。

以上、本節では、機能主義でいう Mood が[Finite Subject]という語順になるということがどのような意味を持つのかを、認知文法理論で提唱されている Grounding の機能と、そこから派生してくる機能、すなわち、伝達内容の事実性に対する話者の主観的判断と語順との関係から明らかにしてきた。次節では、最初に提起した問題に直接関わる Wh 語の特性について検討していく。

4. Wh 語の演算子としての機能と作用域

伝統的に、Wh 語は数量詞 (quantifier) と同じような解釈がなされてきた。次の例から考えていこう。

(19) (a) George saw William.

(b) George saw everyone.

(c) George saw someone.

(d) Everyone saw someone.

(Haegeman (1994: 488))

(19a) では、2つの項 (argument) George と William は、意味的値の定まった定項となっている。そして、単一の出来事を表している。ところが、(19b) の例では、everyone の項の意味的値はひとつに定まらず、特定の範囲の全ての要素が該当することになり、論理的に (20a) のように表示し、その意味解釈は (20b) のようになされてきた。すなわち、everyone の表す意味的値は定まらないので変項 (variable) として x と表す。おおよそ、「全ての x に対して、もし x が人間であれば、George saw x は真となる」というような解釈である。

(20) (a) $\forall x (Hx \rightarrow Sgx)$

(b) For all x it is the case that if x is human then George saw x

(21) (a) $\exists x (x = H) \& (Sgx)$

(b) There is an x such that x is human and George saw x

(22) (a) For every x there is some y such that it is the case that x saw y .

(b) There is some y , such that for every x , it is the case that x saw y .

(Haegeman (1994: 489-490))

(19c) の例は、(21) のように表し、「 x が人間であり、かつ、George saw x が成り立つような x が存

⁹ 完了相の助動詞 **have** や進行相・受動態を示す **be** と法助動詞との違いについては、Langacker (1991: 241), Langacker (2009: Ch. 8)の議論を参照されたい。

在する」のように解釈される。数量詞 every は普遍数量詞 (universal quantifier) と呼ばれ、数量詞 some は、存在数量詞 (existential quantifier) と名付けられてきた。すなわち、数量詞が文中に現れると、意味解釈上は、数量詞を前置させ、数量詞を変項として表示した以下の叙述内容に対して数量詞の機能が適用されるという分析である。このように数量詞の適用される範囲を作用域 (scope) と呼ぶ。このような分析をとると、(19d) のように2通りの意味解釈が可能な文も、数量詞の繰り上げる順番の違いによって (22) のように表すことができるのである。

そこで、今度は Wh 疑問詞にこの分析を応用してみる。

(23) (a) George saw William.

(b) Who did George see?

(c) Which policeman did George see?

(Haegeman (1994: 494))

(23a) の例で目的語項となっている要素を Wh 句として尋ねる疑問文としての (23b) や (23c) を考えてみよう。すると、先ほどの数量詞のような解釈を応用すると、それぞれの意味は (24a, b) のように表すことが可能である。

(24) (a) For which x, x is human, is it the case that George saw x?

(b) For which x, x is a policeman, is it the case that George saw x?

(Haegeman (1994: 494))

(23b) に対応する (24a) だと、「どの x に対して (ただし、x は人間であるが) George saw x が真となるか」というような解釈である。(23b, c) のような例文を生成文法家たちの分析で表すと、それぞれ (25a, b) のようになる。¹⁰

(25) (a) [CP Who_i did [IP George see x_i]]?

(b) [CP Which policeman_i did [IP George see x_i]]?

(Haegeman (1994: 495))

(25) から分かるように、Wh 句が文頭に移動されるのは、意味解釈と関係していることが分かる。すなわち、Wh 句は、その作用域となる命題内容の句 IP の前に置かれるのである。また、ここで注目すべきは時制要素の現れている did も作用域の前におかれているということである。つまり、時制は IP 内の出来事が過去時に位置づけられることを示しており、別の言い方をすると、過去時に位置づけられる命題内容を作用域にとる演算子 (operator) の働きを担っているのである。さらに、ここで注目すべきは、Wh 句と時制という2つの演算子のうち、Wh 句演算子の方が左側に現れているということである。これは、Wh 句のとり作用域が単に IP 部分だけではなく、時制要素も含んでいるということを示唆すると言えよう。(24) の伝統的な意味解釈を見ても、Wh 句の作用域内に時制も含まれることは

¹⁰ その後、表示の仕方は変化し IP (Inflectional Phrase) は TP (Tense Phrase) のように変わったり、x の代わりに痕跡 (trace) という表記を用いたり、さまざまな展開を示しているが、ここでの議論に直接は関わっていないので、Haegeman (1994) の表記に従うことにする。また、Wh 句や変項 x に付いた下付きの記号 i は、移動した Wh 句が元々どの位置にあったかを示すための指標 (index) である。

明らかであろう。

本節では、Wh 句の持つ演算子としての機能と、その機能の作用が及ぶ範囲である作用域との関係から Wh 疑問文の文構造における語順の問題を検討してきた。

5. むすび

さて、(26) として再掲した (3) にまつわる冒頭の問題に立ち返ろう。

(26) (a) **What did she tell you?**

(b) **How did you find the seminar?**

(c) **Who told you that?**

(Huddleston and Pullum (2002: 95, 907))

(26a, b) の例に示すように、Wh 句が主語ではない場合には主語と時制要素の間に倒置が起こるのに対して、(26c) の例にみられるように Wh 句が主語であれば主語と時制要素との間の倒置が見られない。(26a, b) のように、主語以外の要素が Wh 化された場合は、主語と定形要素から成る Mood が [Finite Subject] となっても、Wh 句が主題として機能し、主題構造が維持される。しかし、(26c) の場合は、[Finite Subject] という Mood の機能を優先すると、(27a) ではなく、(27b) という構造になってしまい、機能的に優位となるべき Wh 句が主題となることができないのである。

(27) (a) **Who told you that?**

(b) ***Did who tell you that?**

(27b) の場合、作用域の広い Wh 句を飛び越えて時制要素の作用域が錯綜してしまうことが一番の原因と考えられる。これは、英語が文構造上、さまざまな機能の一部を語順に依存していることがひとつの要因とみなすことができる。たとえば、英語に比べて語順の果たす役割が比較的弱い日本語の例を比べてみよう。

(28) (a) 太郎がそういうことを言った

(b) 太郎がそういうことを言ったの？

(c) **誰が**そういうことを言ったの？

(d) そういうことを**誰が**言ったの？

(28a) のような平叙文をいわゆる yes/no 疑問文にしようとするれば、日本語のような膠着語 (agglutinating language)¹¹ では、(28b) に示すように文末に疑問の助詞を付けるだけで表すことが可能である。Wh 疑問文に相当する (28c, d) においても、疑問詞に相当する語句は、語順による制約を受けない。しかし、英語のように、元々屈折語 (inflectional language) であった言語がその歴史的発達過程において水平化 (leveling) により屈折語尾が衰退し、代わりに従来ある語や接辞に文法的機能を持たせる文法化 (Grammaticalization) とそれに伴う語順の役割の重要性が高まった言語では、文法機能の及ぶ作用域が語順に大きな影響を与えているのである。

¹¹ 言語の類型的分類については、Aikhenvald and Dixon (2017: 3-4) を参照のこと。

語順の重要性に伴い、Wh 語もその語彙的 (lexical) な特性を失い、格 (case) も衰退してきているので、(27a) にみられる Wh 語に主格 (nominative case) があると考えたこと自体が意味をなさなくなっている。それゆえ、(4) として先にあげた下の例のうち、対格になるべき (29b) の who は whom としない方がより一般的になっているのであろう。

(29) (a) **Who** likes John?

(b) **Who** does John like?

(Chomsky (1986: 48))

この問題は、Sapir (2004: 134)でも言及されている。Sapir のいう駆流 (drift) という大きな変化の中で格は衰退してきていると考えられる。それゆえに、現代英語の次の (30-32) の例の中で太字部分の人称代名詞は意味内容からすると、節の主語になっているのは明らかだが、格は主格になっていない。

(30) (a) I'd never known **him** (to) lose his temper before.

(b) I know **him** to be thoroughly reliable.

(31) (a) He kept **them** warm.

(b) *They* were warm.

(32) (a) It was possible for **him** to walk to school.

(b) It was possible that *he* walked to school.

(Huddleston and Pullum (2002: 1244, 1252-1253))

これらの例は、現代英語の格が、意味と結びつく内在格 (inherent case) ではなく、文構造上の要請からくる構造格 (structural case) へと変質してきていることを示唆している。このことから、英語においては語順が重要な役割を果たすようになり、特に時制要素 (と法助動詞) は第2構成素位置に置かれることで命題内容に対する話者の主観的判断 (確定性) を示すような英語の文構造の影響により、主語を Wh 句とする疑問文の特異性が生じたと主張できる。

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon (2017) "Introduction: Linguistic Typology – Setting the Scene," In Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds.), *The Cambridge Handbook of Linguistic Typology*, pp. 1-35, Cambridge University Press, Cambridge.

Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

George, Leland M. (1980) *Analogical Generalization in Natural Language Syntax*. Doctoral dissertation, MIT.

Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to Government and Binding Theory*. Second edition. Blackwell, Oxford.

Halliday, Michael A. K. and Christian Matthiessen (2014) *Halliday's Introduction to Functional Grammar*. Fourth edition. Routledge, Abingdon.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*.

Cambridge University Press, Cambridge.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar: Descriptive Application*. Volume 2. Stanford University Press, Stanford, California.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press, Oxford.

Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Mouton de Gruyter, Berlin.

Sapir, Edward (2004) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Dover, Mineola, New York.

Swan, Michael (2016) *Practical English Usage*. Fourth edition. Oxford University Press, Oxford.

Thompson, Geoff (2014) *Introducing Functional Grammar*. Third edition. Routledge, Abington.